ルネサスが
双葉電子工業に
選ばれた理由。

広告 特集「変化の時代の企業経営、変化に即応できるIT戦略」提供：日立製作所
広告 ビジネスを成功へとつなげるカラープリンタ。キャンペーン実施中！ ーNEC
広告 特集：ハイビジョン並み映像で円滑な会議を　TV会議システム/日立ハイテク
広告 【マルコメ】月次決算処理が30日→5日に！運用コストも20%削減　富士通

子どもたちがコンテンツを生む(中村　伊知哉)

さきごろ岡山で全国マルチメディア祭が開催された。毎年持ち回りの国体方式で、今年で15回を数える。セミナーや展示会場は老若男女で熱気に満ち、金・土・日の3日間で12万人の来場があったという。12万人？　知事も市長も財界や官界の関係者もこぞって顔を見せたとはいえ、この不況にこのにぎわいはどうしたわけか。

IT本番で地域の試みも根づく

15年前、1回目のイベントは湯布院だった。当時はニューメディア祭と呼ばれていた。その頃から関わっている者は少なくなったが、名称をニューメディアからマルチメディアに改め、そしてインターネットが普及して、ITはやっと本番を迎えた。ローカルの取り組みがようやくしっかりした足音をたてるようになった。会場の熱気は、その証だろう。

同じ会場で、小学生向けの二つのワークショップが開催された。一つは、カメラワークショップ。デジカメで自分を表現するものだ。写すとは何か？表すとは何か？それをブロードバンドで世界に発信するとはどういうことか？

初めてシャッターを切る子どもたちが、自分なりの表現方法を探り、発表する。紅葉の赤や空の青に惹かれる子。噴水の躍動感を切り取ろうとする子。会場に飾られたF1カーやコンパニオンのお姉さまを接写する子。大胆で美しいみごとな作品を次々に生んでいく。

映像で考えて、映像で表す。作品を見せ合い、互いを発見する。一人ひとりがコンテンツの生産者となるP2P社会は、この世代が引っ張っていく。このワークショップは、アットネットホーム社がキヤノンの協賛を得て実施した。

http://www.broadspirits.net/canvas/

もう一つのワークショップは、ロボット作りである。MITで開発したマッチ箱サイズのコンピューターに、モーターやセンサーなどを装着し、さらにスポンジやタワシや松ぼっくりといった身の回りのものをくっつけて、自分だけの「虫」を作るというものだ。

心臓部のコンピューターには、子どもが自分でプログラミングして、どのように動き、どんな音や光を発するかといった指令を与える。頭を回転させる虫。ガタガタと地面を走る虫。ふしぎな鳴き声をあげる虫。暗がりで怪しく光る虫。

四角四面だったコンピューターは、生き物に姿を変えている。ロボットやペットやおもちゃや虫に変身して、わたしたちのともだちになろうとしている。身の回りに溶け込んで、ユビキタスな空間を創る。スクリーンから立体の造形へ。そうした姿かたちそのものが、ユビキタス時代のコンテンツだ。このワークショップは、CSKが京都で運営する子どもセンター「CAMP」が実施した。

http://www.camp-k.com/

子どもの創造力を引き出す狙いのNPO活動

これらP2P系とユビキタス系の二つのワークショップを主催したのは、CANVASという名のNPOだ。子どもの創造力や表現力を高めるための活動を推進している。政府やマルチメディア振興センターの支援のもと、ブロードバンド時代のコンテンツを生んでいく土壌を整えていくことを目的としている。

内外の科学館や教育工学系の研究者、アーティストや自治体、企業らが集うプラットフォームとして活動を開始したところだ。川原正人 NHK名誉顧問が理事長を務め、東京大学情報学環の山内祐平助教授と私が副理事長を務めている。総合的学習の時間が学校に導入されたことをはじめ、ITと子どものかかわりを模索する動きが広がる中、注目を集めている。

http://www.canvas.ws

地域のみんながコンテンツを生む

岡山でのイベントの後、日経デジタルコアの「e-Japan戦略と地域の情報化」に関する討論会が三重県の津市で開催された。三重、岐阜、福岡、岡山など各地のIT先進自治体の担当者も参加し、情報化の行方について、夜通し熱く語り合った。

インターネットが普及して、各地で地に足のついた実態が沸き上がり、いよいよ悩みも深まってきた。CANVASとはテーマが異なるが、地域からどのようにコンテンツを発信していくか、課題は共通している。

その足で、函館に向かった。公立はこだて未来大学、東京大学、甲南女子大学、ソニー、ベネッセ、CSK、MITなどCANVAS関係者が集い、IT系ワークショップの企画をめぐって、ここでも夜を徹して語り合った。

インフラの整備は進んでも、コンテンツをどうする。ずっと以前からそんな指摘が繰り返されている。だが、気がついた。コンテンツは、地域が、みんなが生む。次を担う世代が生んでいく。そのための環境を整えていきたい。…みんなの気持ちが熱くなっている、そう感じるツアーだった。

-筆者紹介-

中村　伊知哉(なかむら　いちや)
スタンフォード日本センター研究所長

略歴

1961年生まれ、京都市出身。京都大学経済学部卒。在学中はロックバンド"少年ナイフ"のディレクターなどを務める。84年郵政省入省。電気通信局、放送行政局、登別郵便局長を経て、通信政策局でマルチメディア

政策、インターネット政策を推進。93年からパリに駐在し、95年に帰国後は官房総務課で規制緩和、省庁再編に従事。98年郵政省を退官し、(株)CSK特別顧問に就くとともに渡米、MITメディアラボ客員教授に就任。2002年9月から現職を兼務。経済産業研究所コンサルティングフェロー、(社)音楽制作者連盟顧問、NPO「CANVAS」副理事長を兼務。著書に『インターネット,自由を我等に』(アスキー出版局)、『デジタルのおもちゃ箱』(NTT出版)など。

(C) 2006 Nihon Keizai Shimbun, Inc. All rights reserved.